

第 63 回 SGRA フォーラム概要

第 4 回「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」円卓会議

『東アジア』の誕生－19 世紀における国際秩序の転換－

日 時：2020 年 1 月 8 日（水）～12 日（日）

会 場：フィリピン・アラバン市ベルビューホテル、フィリピン大学ロスバニョス校

主 催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共 催：科学研究費新領域研究「和解学の創成」、早稲田大学東アジア国際関係研究所、
フィリピン大学ロスバニョス校

■フォーラムの趣旨：

19 世紀以前の東アジアは、域内各国の関係は比較的疎遠で、各国が個別に外国との関係を結んでいた。しかし、西洋の諸国がグローバル化の運動を北太平洋まで及したとき、日中韓の関係は政治・経済・通信のいずれの面でも緊密化し始め、その中で「東アジア」を一体のリージョンと見なす想像力が生れた。今回は、このような東アジアの国際秩序の変化、その中で各国の国内秩序の変化を主題に国際対話を試みる。

西洋が強い商業関心と新たな交通・通信・軍事技術をもって該地域に再登場したとき、中国・日本・朝鮮はどのように西洋を認識したか。伝統的な知の体系とそれはどう絡み合ったのか。いずれの国でも反発と同時に新たな知への憧憬が生れ、一方では伝統への挑戦、他方では伝統の再造が試みられた。例えば、日本では、洋学が学校教育の主軸に据えられる一方、秩序の核心に天皇を置き、家族では儒教的な男性優位観が一般化した。この西洋への反発と憧れは国ごとに組み合わせ方が異なり、それは今に至る文化の相違を生み出すことになった。

西洋の進出は各国に自衛を促し、結果的に各国を「国民国家」に変えていった。遅速の差はあっても、国境を明確化し、内部の団結を促すナショナリズムを生み出すことになったのである。その一方、西洋の持込んだ海運網は、人々を国境の外に誘うことにもなった。中国からは東南アジアに加えてアメリカ大陸に大量の出稼ぎ労働者が向い、以前は皆無だった日本からも移民が海を越えるようになった。朝鮮では移民は少なかったが、外国留学生や政治亡命者が現れ、やがて国の将来に大きな影響を及すようになった。ナショナリズムの形成と国境を越える移民・留学・亡命との交錯は、従来の東アジアの秩序を国際関係と国内秩序の両面で大きく変化させ、20 世紀の大変動を準備することになる。

今回のフォーラムでは、およそ以上のような問題群を取上げ、3 つのセッションに分けて各国の事情を比較し、討論して、19 世紀東アジア世界に起きた大転換の全体像を把握したい。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。円卓会議の講演録は、SGRA レポートして 3 カ国語で発行し SGRA ホームページに掲載する。

■プログラム

| 第1セッション：開会 司会：李恩民（桜美林大学） | | | | |
|---|-------------------|-----------------|----------------|---|
| 開会挨拶 | Cho Kwang | 趙 珖 | 韓国国史編纂委員会 | |
| 歓迎挨拶 | Maquito Ferdinand | F. マキト | フィリピン大学ロスバニョス校 | 19世紀のフィリピン |
| 基調講演 | Mitani Hiroshi | 三谷 博 | 跡見学園女子大学 | 「アジア」の発明 |
| コメント | Song Zhiyong | 宋 志勇 | 南開大学 | |
| 第2セッション：西洋の認識 司会：南基正（ソウル大学） | | | | |
| 日本 | 大久保健晴 | Okubo Takeharu | 慶應義塾大学 | 19世紀東アジアの国際秩序と「万国公法」 受容—日本の場合— |
| 韓国 | 韓 承勳 | Han Seunghoon | 高麗大学 | 19世紀後半、東アジア3国の不平等条約克服 の可能性と限界 |
| 中国 | 孫 青 | Sun Qing | 復旦大学 | 魔灯鏡影：18世紀から20世紀にかけての中国 のマジックランタンの放映と製作と伝播 |
| 中国 | 呉 義雄 | Wu Yixiong | 中山大學 | 「華夏と夷狄」から「中国と西洋」へ： 19世紀前期における中国の西洋に関する論 述パラダイムと情報戦略 |
| 第3セッション：伝統への挑戦と創造 司会：村和明（東京大学） | | | | |
| 日本 | 大川 真 | Okawa Makoto | 中央大学 | 18・19世紀における女性天皇・女系天皇論 |
| 韓国 | 南 基玄 | Nam KiHyun | 成均館大学 | 日本民法の形成と植民地朝鮮での適用：題令 第7号<朝鮮民司令>を中心に |
| 中国 | 郭 衛東 | Guo Weidong | 北京大学 | 伝統と制度の創造：19世紀後期の中国の洋務 運動 |
| 第4セッション：国境を越えた人の移動 司会：彭浩（大阪市立大学） | | | | |
| 日本 | 塩出 浩之 | Shiode Hiroyuki | 京都大学 | 東アジア公共圏の誕生：19世紀後半の東アジ アにおける英語新聞・中国語新聞・日本語新 聞 |
| 韓国 | 韓 成敏 | Han Sungmin | 大田大学 | 金玉均の亡命に対する日本社会の認識と対応 |
| 中国 | 秦 方 | Qin Fang | 首都師範大学 | 近代中国女性のモビリティ—経験と女性「解 放」に関する再思考 |
| 2020年1月10日（金） | | | | |
| 第5セッション（14：00—15：30）：全体討議 司会：劉傑（早稲田大学） | | | | |
| 青山 治世（亜細亜大学）、平山 昇（九州産業大学）、朴 漢珉（東国大学）、孫 衛国（南開大学） | | | | |
| 第6セッション（16：00—17：30）：全体討議 司会：劉傑（早稲田大学） | | | | |
| 自由討論 | | | | |
| 総括 三谷 博（跡見学園女子大学） | | | | |

□フォーラムの資料は下記リンクよりご覧いただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/research/kokushi/2019/12468/>

■フォーラムの経緯：

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月のアジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月北九州にて、日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

この円卓会議は2016年度から毎年1回、全部で5回開催する。残りの2回は近現代をテーマとして取り上げる。

また、3か国語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図る。

□メールマガジンのバックナンバーは下記リンクよりご覧いただけます。

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>